Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-29

野生のデモクラシーについて : 新しいアナキズムのグローバル・ポリティクス

土佐, 弘之

(Citation)
国際政治,168:131-145

(Issue Date)
2012

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008886

日本国際政治学会編『国際政治』第168号「国際政治研究の先端　9」（二〇一二年二月）

野生のデモクラシーについて
――新しいアナキズムのグローバル・ポリティクス――

土佐弘之

はじめに

資本の支配・抑圧からの解放という目的の下に国家権力の奪取・プロレタリア独裁の必要性を唱える、いわゆるマルクス＝レーニン主義的言説が影響力をもった時代があった。しかし、スターリン主義という名の恐怖政治の経験を通じて国家による支配・抑圧という問題が前景化していくことで、マルクス＝レーニン主義によって一時的に掻き消されていたアナキズムの思想が再評価されるようになった。その後、ソ連を中心とする国家社会主義体制が崩壊しネオリベラリズム全盛の時代へと突入すると、急速な規制緩和に伴う社会の分極化・貧困化といった問題が再び注目されるようになると同時に、デモクラシーの機能不全の問題も深刻さを増すようになっていくことになる。そうした中、例えば一九九四年以降のサパティスタの叛乱や一九九九年のシアトルや二〇一一年のニューヨーク・ウォール街での直接行動などに見られるように、形式的デモクラシーの枠の外にはみ出す形で、資本や国家による支配・抑圧からの解放を求める新しいアナキズム[1]と呼ばれる思想・運動が再び活発化するようになってきている。

本稿の目的は国際関係論の中でも扱われるようになってきたアナキズムの思想・運動のもつ意味について[2]、その新しい動きを含めて領域的国家主権を超えるデモクラシーという点から再検討・評価を試みることにある。まずグローバル政治の中で重要性を帯びつつあるアナキズムについて、ホッブズ的リアリズムとアナーキーという関係性の中に位置づけながら再検討を加える。次に領域的国家主権とデモクラシーの深化が両立しなくなっている状況を明らかにしながら競争的デモクラシーの危機状況について簡単に振り返りつつ、「野生のデモクラシー」としてのアナキズムが顕在化するようになった背景を見ていく。さらに政治人類学的知見を振り返りながら

野生のデモラクシーつまり国家に抗するデモクラシーとその現代的位相について再検討を加える。最後に新しいアナキズムといわれるものをマクロの歴史的文脈の中に位置づけながら、権力のフローを捕獲する装置である国家とそれに縛られた「制度としてのデモクラシー」との関係、またそこにおける、「運動としてのデモクラシー」の役割の一端を担うアナキズムの（不）可能性について検討する。

一　ホッブズ的リアリズムにとってのアナーキー

例えば国際関係論においてアナキズムが無視されてきたという事実は国際関係論が国家のためのディスコースとして形成されてきたということの結果であるという指摘がある。[3]その国家中心主義パラダイムは多少の揺らぎはあるものの依然としてヘゲモニックな位置にあり、結果としてアナキズムは周辺化され続けていることは確かであろう。しかし冷戦終焉後頃から、国際関係論の中でも外交史と同様に国家中心主義的パラダイムを中核とする安全保障研究においても、批判的安全保障研究という流れが形成されるなど、少しずつ変化が見られるようになってきている。解放（emancipation）という鍵概念を安全保障研究に持ち込んで批判的安全保障研究という道筋をつけたのはケン・ブースであるが、彼によれば、権力や秩序ではなく解放こそが真の安全保障をもたらすという意味で、解放と安全保障は同一のコインの表裏をなしているという。[4]つまり国家安全保障（軍事的安定）のために諸個人が抑圧されているという状況を維持するのは本末転倒であるというのが彼の趣旨である。ブースは明示的にアナキズムについて言及していないが国家安全保障の論理はおよそ人間の解放といった価値とは相容れないものであると指摘してきたのは、まさにアナキズムの思想家たちである。アナキズムの思想は、権力が支配される者たちの安全保障のために確立されたものであるといったホッブズ的契約論の虚構性を暴くことを通じて見ヶ〆の論理[5]とそれを背にした支配体制を批判し続けてきた訳で、批判的安全保障研究をさらに進める上でも、そうしたアナキズム思想を再検討する意義はあると思われる。

ホッブズ的契約論の虚構性を示すものの一つとして、二〇世紀における国家間の戦争による死者数は三千万人以上、国家機構による虐殺などに伴う死者数はそれの五倍以上の一億七千万人にもなるという推計がある。[6]ここで注意すべき点は、国家機構による虐殺などに伴う死者数が国家間の戦争による死者数を上回っているということと同時に、いずれの悲劇にも国家という制度が深く関与しているということである。つまりウォルツが喝破したように世界政府が樹立されれば国家間戦争はなくなるかもしれないが、[7]支配体制としての国家がある限り多数の死者を出す紛争はなくならない。数々の悲劇をもたらしたのが国家という制度的権力であるという歴史的事実があるにもかかわらず、国際政治学においてはヨーロッパの宗教内戦の影が投影されたボダン＝ホッブズ的な絶対的な主権概念に拘束される形で国際政治の場を複数の主権国家によって構成されるアナーキー状態として捉える（ネオ）リアリズム的世界観が支配的な影響力をもってきたため、[8]悲劇の原因は国家にあるのではなく無

政府状態という国際政治の構造にあるとされてきた。そのため問題の所在を見誤った可能性は否定できない。もちろん、グローバル・レベルにおいて純粋なアナーキー状態などは存在せず、ブルの「アナーキカル社会」論のように国際法などの規範を共有する国際社会の存在を想定するグロティウス的世界観も有意なものとしてあったし、[9] 表面上はアナーキーながらもグローバル・ガバナンス（アナーキカル・ガバナンス）が形成されつつあるという見方もあった訳だが、[10] 国内政治との分節化を前提に独自の領域とされた主流の国際政治学は常にホッブズ的アナーキー観と表裏一体であり続けた。

一方で、アナーキーを回避するという名目の下、不可分の絶対的主権という想念が制度として形作られていく過程で、多くの人々は時にはその命を奪われ時には抑圧状況下におかれることになった。その原因はファシズムや国家社会主義といった政治体制であり、デモクラシーであれば、そうした問題はおきないという批判があろう。しかし、リベラル・デモクラシーもまた国家に囚われながら戦争に関与するだけではなく構造的暴力の維持にも深く関わってきたことは否定できない。どのような政治体制であれ、それが主権国家という制度に深く埋め込まれている限り、そこにおける暴力や抑圧を払拭することはできないというのが、アナキズム思想の要諦の一つであり、そうした国家による支配・抑圧からの自由を求める思想・運動こそがアナキズムであったことは周知の通りである。

人間に対する人間の統治はいかなる名称を装うとも抑圧であるとし、「社会の最高の完成は秩序とアナルシーとの結合に存する」と指摘した上で、アナーキー、つまり支配者の非存在が目指すべき統治形態であると明確に述べたのはプルードン（P. J. Proudhon）であるが、[11] その後アナキズムという言葉が自由といった価値と重ねあわせて広く肯定的に使われるようになったのは一八八〇年以降とされる。[12] しかし現在でもそうであるがアナキストという言葉はしばしば現実離れしたユートピア主義者または暴力・混乱をもたらす破壊分子といった否定的イメージで語られることの方が多い。歴史を振り返ってもマルクス＝レーニン主義からは異端派として排斥されたプルードンやバクーニン（M. A. Bakunin）のアナキズム、ドストエフスキーの小説『悪霊』に登場するピョートル・ヴェルホヴェンスキーを彷彿とさせるような内ゲバ的殺人も厭わずにシステム的な無秩序を生み出そうとする過激なアナキスト、さらには一九三〇年代の世界大恐慌を契機にイタリア・ファシズムや日本型ファシズムなどへと回収されていったアナルコ・サンディリズムや農本アナキズム、反共主義という一点で国民党右派と手を結んだ中国アナキズム――といった記憶がよぎる。ロシア革命後の国家社会主義がヘゲモニックな位置にあった時期においては、運動としてのアナキズムは影を潜めていたが、スターリニズム批判、さらには一九六八年前後の新左翼運動のうねりの中から新たにアナキズムの流れが出てきた。しかし、そこでもまた警察による厳しい弾圧の元で、アナキズムの黒色は再び暴力や混乱の象徴とみなされていった。[13] ソ連などの国家社会主義体制の崩壊に伴い「正統派」マルクス主義が失墜し一九九〇年代にはネオリベラリズムが世界を席巻するようになるが、

そうしたネオリベラル・レジームに対抗する形で新しいアナキストがあらためて登場してくる。たとえば、一九九九年のシアトルや二〇一一年のアテネやニューヨークでの街頭直接行動に象徴される形で新しいアナキストたちはオルタ・グローバリゼーション運動の一端を担うようになるが、ここでもまたマス・メディアでのアナキスト像は依然として暴力や混乱の元凶といったプロットにはめられる形で描かれている。

ここで強調すべきは、アナキズムと称されるものはアナルコ・サンディカリズム、アナルコ・コミュニズムからアナルコ・キャピタリズムに至る左右に大きな幅をもった無定形な思想・運動として展開してきたにも関わらず、いざ社会運動として台頭し体制に脅威感を与えるようになると支配的な言説の中において常に暴力や混乱といったネガティブなイメージと結びつけられて語られるということである。その一つの要因はアナキズムというものが目指すものが「絶対的デモクラシー」[14]または「来るべきデモクラシー」[15]とも呼ばれるようなラディカル・デモクラシーを目指しており国家という政治的制度を維持する側の人間の恐怖を呼び起こすことにある。より直截的に言えばアナキズムが表象するものは、プラトン、アリストテレス以来、忌避されてきた制御不能なデモスまたはマルチチュードであり、その意味でデモクラシーは常に混乱を極めた衆愚政治となる危険性を孕むものとみなされてきたのである。デモスは国家を脅かすという観点から、その参加を一定程度制限するべきであるといったシュンペーター的なエリート・デモクラシー（制限デモクラシー）論が導出されることになる。つまり、その形式的デモクラシーは国民国家と表裏一体の関係になることで国民と非国民を分節化するといった排他的なモメントを有するだけではなく、制御できない群衆の参加・動員を制限するといった排他性を有することになる。また選挙代表制デモクラシーがその限定的参加を通じて支配の正当性を付与するのと同時にモッブに対する防波堤の役割を果たす一方で、国家安全保障装置もまた内外のアナキズム的脅威に対して国民を守る役割を果たしているといったホッブズ的契約論を援用しながら支配の正統性を調達すると同時に物理的な防波堤の役割を果たしている。端的に言えば選挙代表制デモクラシーと国家安全保障装置は時には共振しながら国家の絶対的主権という虚構を支える点で協働関係にあるということである。

この点に関連して、例えば、バクーニンは、次のように記している。「いかなる国家も、その形態がいかに民主的であろうとも、もっとも赤い政治的共和国でも、人民代表制の名で知られた虚偽という意味でだけ人民的である共和国でも、人民に必要なもの、すなわち何らかの干渉も庇護も上からの強制もなしに、下から上まで固有な利益の自由な組織を人民にあたえることはできない。なぜなら、あらゆる国家は、どんなに共和的で民主的な国家であろうとも、マルクス氏の想像するえせ人民的な国家でさえも、その本質からすれば、人民自身よりもよく人民の真の利益を理解していると称するインテリゲンチャ的な、したがって特権的な少数者による上から下への大衆統治にほかならないからである。つまり、有産統治階級とし

ては、人民の情熱、人民の要求を満足させることは、断じて不可能である。だから残るところは、国家的暴力という一つの手段、一言でいえば国家である。なぜなら、国家とはまさに暴力であり、暴力による支配だからである。この暴力は、できれば仮面をつけていることもあるが、極端な場合には無遠慮でむきだしなものである。[16]」

たしかに形式的デモクラシーの覇権によって暴力による支配を覆う仮面は洗練されてきてはいるが、その擬装がうまくいかない場合、例えば限定的デモクラシーの機能不全が進むことになる。民主的な装いと特権的な少数者によるトップダウンの統治という現実との間のギャップが顕著になっていくと、支配に対する批判的思想・運動としてのアナキズムという亡霊が再び姿を現し直接行動に象徴される「野生のデモクラシー[17]」がレジームに挑戦するようになる。逆に言えば台頭する野生のデモクラシーは限定的デモクラシーによって擬装された「非暴力的」暴力体制の矛盾を白日の下に晒そうとしているのである。しかも一九九九年のシアトルでの直接行動がWTOの交渉やその後の国際政治経済体制の行方に間接的な影響を与えたように新しいアナキズムの運動が現実の国際政治経済に与える影響は決して無視できないものになっている。端的に言えば新しいアナキズムの運動の興隆は主権国家を基本的構成要素とする現在の国際政治経済レジームの危機的状況を表象するものと見ることもできよう。そして国家中心主義的パラダイムの綻びが大きくなるとともに政治思想研究のみならず[18]、国家中心主義の牙城ともいえる国際関係論研究においてもアナキズムの思想を再評価する動きが出てきていることについては冒頭で触れた通りである。このようにグローバル政治の中で再び重要性を帯びつつある新しいアナキズムが推し進めようとする野生のデモクラシーの意味について次にみていきたい。

二　国家に囚われた「制度としてのデモクラシー」の機能不全

アメリカやフランスでもデモクラシーという概念が次第に否定的な意味合いから肯定的な意味合いをもつようになっていくのが一九世紀とされるが[19]、その内容をめぐっては長い闘争が続いたものの、一九九〇年前後、国家社会主義体制や人民民主義体制が崩壊すると選挙デモクラシーまたは競争的代表デモクラシーと言われるものが覇権的なデモクラシー概念となり、時にはネオリベラル・グローバル・ガバナンスの政治的コンディショナリティとして世界の隅々にまで波及することになった。ここで注意すべきはヘゲモニックな位置に立った競争的デモクラシーとはプラトン以来忌避されてきた制御不能なモッブ（群衆）の参加を制限するための限定的な代表制デモクラシーであるという点である。限定的代表デモクラシー論者の代表としてマディソン（J. Madison）がしばしば挙げられるが、「直接民主政諸国家は、これまでにつねに混乱と激論との光景を繰り広げてきたのであり、個人の安全や財産権とは両立しがたいものとなり、また一般的にその生命は短く、しかもその死滅に際しては暴力をともなうものとなってきたのである[20]」という彼の言葉はまさに政治エリートのモッブに対する恐怖を如実に示している。

しかし直接参加を阻止する代表デモクラシーはデモクラシーの深化という点において大きな限界を抱えていている。冷戦終焉から約二十年経った現在、そうした競争的デモクラシーは重大な危機に瀕している。例えばグローバル金融危機後、社会経済的に困窮している人々が二〇一一年のウォール街占拠といった形で街頭での直接行動に出たことの背景の一つには、制度としての選挙デモクラシーがネオリベラリズム等に起因する貧困・社会的格差といった問題に十分な対応ができず機能不全に陥っているということがある。[21] 選挙ビジネスが支配する中で競争的民主主義が空洞化するとともに、既存の代表デモクラシーは代表される者の利害・価値などを十分に反映できないまま時には全体の利益を騙る一部利益集団による政治に支配されるという事態さえ生じさせている。加えて選挙投票日だけ国民を主権者に据える形骸化した選挙デモクラシーつまり単なる数の集計に傾斜する集計的デモクラシーはデモクラシーとしての質を低下させ、結果として制度としてのデモクラシーへの不信・失望・無関心などをもたらしてもいる。さらに、グローバリゼーションの急速な進展とともに国境を越えて人々の利害が複雑に絡み合うグローバル・イシューが多く出現しているものの、制度としてのデモクラシーが主権国家という枠に縛られているため政策的にも十分な対応ができないという問題が起きている。確かに国家を越えるトランスナショナルなネットワーク・ガバナンスも立ち現れてきてはいるが、そこにおける「民主主義の赤字」は明らかで、ネットワーク・ガバナンスの民主化も大きな課題の一つとなっている。[22]

こうした制度としての手続き的デモクラシーが抱えている問題についてオルタナティブ的なものがいくつか提示されてきてはいるが、いずれも根本的な解決に至っていないのが現状であろう。例えば代表的デモクラシーとその中核をなす政党システムの機能不全の問題があるが、それに応える形で積極的に検討されているものの一つが直接参加型デモクラシーの再導入である。直接参加を通じて政治的疎外感を強めていた民衆自身のローカルな経験を政策決定に反映しながらデモクラシーの質を高めていこうという試みがなされている。例えばブラジルのポルト・アレグレなどで導入された参加型予算などは、そうした試みの一つの例であろう。[23] サントスによれば、直接参加型の予算編成が進められたことで貧富の格差が激しい社会における形骸化した代表デモクラシーは高い透明性やアカウンタビリティーを有した質の高い再分配デモクラシーへと変革されていったという。[24] こうした直接参加型デモクラシーの試行は今後も求められていくことになるだろうが、これをナショナル・レベルにまで拡張するとなると代表デモクラシーという制度との齟齬・緊張がもたらされることになる。また大規模な直接参加型デモクラシーは過剰な政治的インプットによって衆愚政治的混乱を招く危険性があるといった批判が限定的エリート・デモクラシー論者側から再び出されることになるし、過剰な政治的動員に伴う混乱を怖れポリシングの強化を伴ったデモクラシーの一時停止、権威主義体制への逆行といった反動もでてくることになる。

次に集計デモラクシーの欠点を補うものとして注目されているも

のの一つとして熟議デモクラシー論がある。確かに時間をかけて係争事項について討議、熟議することは政治への深いコミットメントを促し異なる立場・意見に対する理解を深めるなど、デモクラシーの質を高めることに寄与するであろう。[25] 嘗て民主主義の学校としての地方自治ということが言われたのと同様に、熟議のためのミニパブクリックは比較的容易に実現できるだろうし、それをマクロ・レベルのデモクラシーの改善につなげていくことも可能であろう。[26] しかし、やはり国家やそれを越えた範囲での意思決定となると時間的にも規模的にも熟議は現実的に難しくなると考えられている。この規模の問題は先に挙げた直接参加型デモクラシーと同様に熟議デモクラシーにおいても生じる。さらに討議ないしは熟議デモクラシー論は同じ資格をもった市民間の水平的な関係が前提となっており権力関係によるコミュニケーションの歪みといった問題を軽視する傾向があると批判されることが多い。[27] 熟議のプロセスに参加できない人々の問題もまた残る。直接参加や熟議といったオルタナティブ的な制度も不十分にしか機能しないとなると「制度としてのデモクラシー」という受け皿からこぼれ落ちた政治的なものが「運動としてのデモクラシー」として奔出することになる。

「制度としてのデモクラシー」のより根本的な矛盾は、それが主権国家という領域（土）性に縛られていることに伴う問題である。それは、例えば民主主義理論で重要な論点の一つである「利害当事者原則（the principle of affected interests）」[28] に照らして見ると明らかである。「影響を受ける当事者は、その意思決定に参加する権利がある」という原則が前提であれば、グローバリゼーションの深化とともに、ある政治的決定によって深刻な影響を受ける人が国境を越えた所にも多数現れる状況下ではデモクラシーは国家という単位から解き放たれなければならなくなる。換言すればデモクラシーを構成するところのデモスそのものを定義しなおす作業が必要となるということである。このことと関連して、ウィリアム・コノリーは「デモクラシーのエートスを国家に限定すれば、デモクラシーを国家という監獄につなぐことになる」[29] とか、「デモクラシーを領域的国家に閉じ込めることは、排他的ナショナリティーへの圧力を強め悪化させることにつながる」[30] と述べ領土的デモクラシーがデモクラシーの危機の根幹に関わっているという指摘をしているが、主権国家単位の代表制民主主義を問い直す動きは代表制の機能不全だけではなく代表デモクラシーが埋め込まれているところの主権国家そのものを問い直すという点で、その批判はより根源的である。この批判は制度としてのデモクラシー、そしてその基盤である国家という制度を根本的に問い直すという点においてアナキズムの思想・運動と通底するところがある。しかし比較政治学などの「常識」からすれば「国家なしにはデモクラシーは成立しえない」のであり、[31] 主権国家単位のデモクラシーを守る立場からすれば政治的共同体をグローバルに拡張したデモクラシーなどありえないということになる。

こうした批判に対して、例えばヘルドらはコスモポリタン・デモクラシー論などのオルタナティブを提示しているが、彼自身がアナ

キズム思想に対して注意を払っていないことからもわかるように、[32]彼のコスモポリタン・デモクラシー論自体もまた依然として社会民主主義的国家を前提にした議論から抜け出していないという点でアナキストからの批判を受けている。[33]国家に囚われたデモクラシーという問題は社会民主主義的なコスモポリタン・デモクラシー論にまで影を落としていると言えよう。そうした中で、国家に囚われたデモクラシーを根底的に問い直すものの一つとして、「国家に抗する社会」といった事例から国家に抗するデモクラシーの可能性を探る動きが再び出てきたことは注目すべきことであろう。次に、その「国家なきデモクラシー」という批判的オルタナティブを提示してきた政治的人類学などの視点を含めて見ていきたい。

三　国家に抗するデモクラシー
――「野生のデモクラシー」というアナキズム的視座

政治人類学者ピエール・クラストル（P. Clastres）は、ブラジルのアマゾン地域での「未開」社会でのフィールドワークなどを通じて、未開ないしは野蛮な社会と位置づけられてきた「国家をもたない社会」を社会的発展の初期段階にあるものとしてではなく国家形成を阻む智恵を積極的に適用し続ける「国家に抗する社会」としてみるべきであるといった見方を提示した。[34]国家なき社会とは権威なき首長制のようなもので、そこにおいては言葉と暴力との分離などを通じて首長が首領権力となることを妨げながら絶対不可分と称する「一」なる主権的権力がたちあがるのを阻止する智恵がうまく働いているのだという。その主張は、国家なき社会を歴史以前の社会とするようなヘーゲル的歴史哲学観ないしは進歩主義史観そのものを否定するという意味で大きな衝撃を与えた。同時に国家を積極的に祓い捨てる智恵というものを共有する「国家に抗する社会」があるとすれば、それは、北米の「未開」社会に「万人の万人に対する戦い」といった自然状態を見出した上で「国家への服従は安全保障の提供者との契約」の必要性を唱えたホッブズ的論理を根本から揺るがすことになる。つまりクラストルのアナキスト的歴史パラダイムは国家に対して政治的無秩序としてのアナーキーを対置するという誤った二分法そのものを問い直しているということになる。

同様にアナキスト的歴史パラダイムを大胆に提示したものとしてジェイムズ・スコットの著作『統治されないようにする技術』がある。[35]スコットによれば、大陸部東南アジアに広がるゾミア（Zomia）と呼ばれる標高三百メートル以上の山地に居住する山地民の歴史は国家形成から取り残された未開社会の歴史ではなく、二千年に亘って奴隷、兵役、徴税、疫病そして戦争といった国家形成プロジェクトの抑圧から積極的に逃れてきた社会の歴史であるという。まず、山地民は、低地水田に拠点をおく国家がアクセスしにくい山地を居住地として積極的に選択し、焼畑農耕などに拠ることで分散居住し水田国家からの収奪（徭役・納税）や奴隷狩り商人からの襲撃を回避しようとしてきた。また首領権力と階層化を嫌う山地民は自己社会の中に国家権力形成を阻止するメカニズムを維持しきたという。そ

の結果、山地民は国家を持たない土着のデモクラシーを自己生成しながら平等主義、自治及び流動性と可変性を特色とする社会を形成してきた。つまり国家が徴税できない者を野蛮人とする以上、山地民は国家の圏域から離脱することで「野蛮」を自ら選択したということになる。要するにゾミアは歴史から取り残された未開社会ではなく積極的に国家回避戦略を展開してきた歴史的帰結として捉えるべきというのがスコットの主張である。

こうしたアナキスト的なグローバル・ヒストリーは国家中心主義的歴史そのものの修正を迫っているが[36]、それは同時に依然として国家に囚われているデモクラシー論にもインパクトを与えている。たとえばクラストルらが見出した「国家なき社会」の知恵を、「国家に抗するデモクラシー」ないしは「野生のデモクラシー（la《démocratie sauvage》）」として再生しようとする、フランスの政治哲学者ミゲル・アバンスールの試みはその一つの例であろう[37]。アバンスールによれば、「野生のデモクラシー」とは文字通りの「未開社会」におけるそれではなく、制度に飼い慣らされない、異議申し立てを続ける運動としてのデモクラシーを指す。「国家に抗する社会」に見出される「野生のデモクラシー」のスピリッツ、つまり政治的支配を最小化しようとする志向は、アマゾン奥地や東南アジア内陸部の高地といった「辺境」だけに見出されるものではなく、近代国家によって囲い込まれた政治的空間の中に住む我々の中にも息づいており、それが時折アナキズムの思想・運動として立ち現れてくるものであると理解すれば、「野生のデモクラシー」を「叛乱するデモクラシー（la démocratie insurgeante）」としてのアナキズムなどと関連づけて考えることは、それほど奇矯なことではないであろう。

アバンスールによれば、「叛乱するデモクラシー」とは政治制度ではなくデモス（民衆）によって非支配の状態を作ろうとする行為を指し、その行為は特定の時期に限られるものではなく障害に直面するとともに立ち現れてくるものである[38]。そこにおける国家が飼い慣らすことができない「野生のデモクラシー」とは、アバンスールも依拠しているルフォールのデモクラシーについての議論、特にデモクラシーにおける非決定性という問題とも深く絡んでいる[39]。宗教という外部による正当化の論理（神の主権）に抗する形で、デモクラシーは個人主義的な自律性そして国民主権を押し立てながらヘゲモニックなものになってきたが、一方で世俗化とともに確信の指標が解体し全ての市民が同意する共通善が存在しない以上、デモクラシーはそのミニマムな手続き的定義以外には実質的な内容や指標・目的を欠いており「野生のデモクラシー」の突き上げに呼応する形で絶え間なく自己生成（オートポイエーシス）を続けるしかなくなる。こうした理解によればデモクラシーとは単なる制度ではなく非決定性を特徴とする運動ということになる。そして、その運動が非支配（non-domination）という自由[40]を目指すものであり続ける限り、それは国家という枠を超えようとするアナキスト的運動にならざるをえなくなる。

国家としての枠を超えようとする以上、運動としてのデモクラ

シーとしてのアナキズムはトップダウン的な組織化を拒否するし、そうした組織化を指示するようなグランド・セオリーも忌避することになる。そこで出てくるのが自律、自発的アソシエーション、相互扶助、自己組織化、直接デモクラシーといった、古典的アナキズムから受け継いでいる実践的プログラムである。アナキスト人類学者のデヴィド・グレーバーはマダガスカルでのフィールドワークの知見などを生かしながら、その野生のデモクラシーの精神を一九九九年のシアトルの街頭などにおける直接行動に体現される「叛乱するデモクラシー」に援用することを試みているが、そこにおける彼のエスノグラフィー『直接行動』の中で「直接行動は古い殻の中に新しい社会をつくろうとしているようなものである」と表現している[41]。その発想は国家権力の奪取ではなくボトムアップ式に社会のあり方を変えようと考えたプルードンらのアナキズムの流れを汲むものといってよい。

たとえばチアパスにおけるサパティスタ運動からシアトルにおける反ＷＴＯの直接行動に至る一九九〇年代から二一世紀初めに見られた新しいアナキズムのうねりは、ネオリベラリズムの全面化に伴うデモクラシーの危機に連動して出現してきた野生のデモクラシーないしは叛乱するデモクラシーと言えよう。「旅するサーカス」とも形容される、一九九九年一一月のシアトル（ＷＴＯ）、二〇〇〇年九月のプラハ（世銀＝ＩＭＦ）、二〇〇一年七月のジェノバ（Ｇ８）などにおける一連の抗議行動は、ガンディー（M. Gandhi）が率いて行った「塩の行進」やマーティン・ルーサー・キング・ジュニアが率いて行ったワシントン大行進にも似た「現代の政治的巡礼」といった側面があるという指摘の通り[42]、これらの直接行動は、ネオリベラルなグローバリゼーションのもつ構造的な暴力性を批判すると同時に、それと連携する国家の治安維持装置による直接的暴力を白日の下にさらす役割を果たしたとも言えよう。また祝祭的な直接行動はパリ・コミューンのように街頭の中に一時的な自主管理空間（Temporary Autonomous Zone）を出現させるという戦術をとることで主権的権力に構成された政治的空間そのものを揺さぶることを図っている[43]。しかし主流のマス・メディアは直接行動を無視するか暴力的側面を強調することでその正当性を削ぐ形で報じ続けており、その意味では相変わらずアナキズムと暴力・カオスを結びつけるイメージの再生産が続けられているのも変わらない一方の事実としてある。

結びにかえて――新しいアナキズムの（不）可能性

ポスト社会主義の時代に入り国家社会主義による支配・抑圧という問題が遠景に退きネオリベラリズムが全盛となると、逆に資本による支配・抑圧という問題が再び前景化するようになってきた。そうした中で、制度としてのデモクラシーは国家という枠に縛られていることもあり十分な対応ができず、その危機を深めている。そこで顕在化しつつあるのが、資本からの支配と同時に国家による支配に抵抗する新しいアナキズムであるが、こうした新しいアナキズムまたはポスト・アナキズムと呼ばれるものは古典的なアナキズムと、

どこが違うのであろうか。アナキズムとは無定型な思想・運動であり、それを十把一絡げに語ろうとすることが誤っていると思われるが、あえて単純化して整理すれば、新しいアナキズム（の一部）はポスト構造主義的思想と同様に権力そのものを完全に廃絶することは不可能であるという前提から出発しているところにあり、そこが国家権力の廃絶を夢見ていた古典的アナキズムとの大きな違いであろう。古典的アナキズムが反政治というユートピアを志向していたとすれば、新しいアナキズムは反政治的な政治という（不）可能性を志向としているという点でポスト・アナキズムとも呼ばれる。[44] ポスト・アナキズムの方向性、つまり権力の廃絶そのものが不可能であるにもかかわらず権力による支配を最小化しようとする試みは、絶え間ないデモクラシーの深化や運動としてのデモクラシーにつながっていくことになる。デモクラシーを単なる制度ではなく非決定性を特徴とする運動として捉える点で、デリダ（J. Derrida）やランシエール（J. Rancière）らのポスト構造主義的デモクラシー論とも収斂しているところが見出せる。[45] そこには国家を含めて自明のものとされているものの基礎付けを根底から問い直すファイヤアーベント（P. K. Feyerabend）の言うような方法論的アナキズムといった共通性もみてとれる。[46] 一方ではプルードン以来の古典的アナキズムにおいても相互扶助を基礎にしたボトムアップ的自己組織化社会といった議論はオートポイエーシス、非線形性、開放性、共進化といった複雑系理論における議論と重なりあっているという指摘もある。[47] 確かにトップダウンの社会工学的アプローチを拒否してオートポイエーシスとしてのデモクラシーをボトムアップ的に再構成しながら主権国家体系を超えていこうとする発想は古典的アナキズムにも見られるものであり、新しいアナキズムはそれを継承しつつ、さらにポストモダン的なリゾーム型社会の登場に呼応する形で革新を加えているということになろう。

では新しいアナキズムの思想・運動の目指す方向に沿って国家が実際に溶融していくかとなると、それはまた別の問題であろう。フーコー（M. Foucault）やドゥルーズ（D. Deleuze）などにならい、権力を固定的なストックではなく遍在するフローとして捉えたとしても、国家はそうしたフローとしての権力を大量に捕獲する装置としてグローバル政治の中で大きな役割を果たしてきたことは間違いないし今後も大きな役割を果たしていく可能性は高い。近代への移行期においては帝国、イタリアの都市国家、ハンザ同盟のような都市同盟等の多様な政治的エージェンシーの中の一つの形態にしかすぎなかった主権国家が、ここ二、三世紀の歴史の中で標準的な政治制度として完全なヘゲモニーを勝ち得るまでに至ったというのが社会ダーウィニズム的な制度進化論に立った見方であるが、[48] そうした事態が暫く続くかもしれないということである。また二一世紀初め、西（欧米）から東（アジア）へのパワー・シフトが起きているように見えるが、それ自体は単に覇権国の権力低下に伴う主権国家体系内の再編過程の現象であって主権国家体系そのものの変容を意味しない。

しかしグローバル金融危機などに象徴されるように、フローとし

ての権力を十分に捕獲できず、国家はその過剰流動性に大きく揺さぶられるようになってきているという事実もある。つまりフローとしての権力はその中心を移動しつつ、一方では拡散と集中を繰り返しながら領域的主権国家体系とそれを基礎にした代表デモクラシーの危機をより深刻なものにしている。そうしたパワーの再編成過程における矛盾の累積に呼応して下からのグローバリゼーションの一部を構成する形で新しいアナキズムの思想・運動が台頭している。

アナキズムの思想・運動は権力支配に対する抵抗として展開してきたが、パリ・コミューンやスペイン内戦といった歴史の短い一コマでの「勝利」を除けば一般的に敗者の歴史であり続けた。しかしリチャード・フォークも指摘している通り、（新しい）アナキズムの思想が国家に囚われた「制度としてのデモクラシー」のさらなる民主化、つまりグローバル・デモクラシーのための契機を提供している点は評価すべきであろう。[49] 換言すれば、新しいアナキズムは古典的アナキズムと同様にアナーキカルなマルチチュードを恐怖の対象として措定しつつ排除してきたボダン＝ホッブズ的国家主権の政治に対して挑戦しながら、グローバリゼーションの深化を追い風にして国家という牢獄に繋がれてきたデモクラシーを自由な空間に解き放つ潜在的可能性を有している。

自律や相互扶助を強調するアナキズムの思想はホッブズ的リアリズムや弱肉強食的な社会的ダーウィニズムに基づく国家主義的世界観と対極的位置にあったため非現実的なユートピア主義として一蹴されてきた。しかし非支配を目指すユートピア主義は、反国家主義、相互扶助、連合、直接参加、さらには生態地域主義といったオルタナティブを通じて危機的現状を超えるグローバル・ビジョンを提示する可能性を有している。[50] またアナキズムの思想の根底にある「他者に支配されることを拒否する」という自律への志向は相互扶助の志向と同様に、我々が日常的に感じているものである。それは日常生活の中でもしばしばアナキスト的心情やライフスタイル・アナキズム[51]と揶揄されるような振る舞いとして立ち現れるものである。そうした中、支配の見返りであるはずの保護が十分に行われなくなり支配の正当性が失われるようになれば当然アナキスト的インパルスは強くなる。また支配に抗する思想・運動を世界的規模でネットワークとして繋いでいく分散的な情報インフラストラクチャーも一段と進化している。グローバル化の深化と共に深まる主権国家体系の矛盾、それとともに深刻になっている「制度としてのデモクラシー」の危機に呼応する形で出現した「野生のデモクラシー」としての新しいアナキズムは、まだ断片的ではあるものグローバル・アナーキズムという形をとりながら国家や資本という足枷からの解放を目指し非支配への志向というユートピア主義的な想念に沿ってデモクラシーの深化を推し進めるためのプラットフォームを形成しつつある、と言ったら早計であろうか。[52]

（1） 新しいアナキズムについては、D. Graeber, “The New Anarchists,” *New Left Review* 23, 2002, 61–73; 高祖岩三郎『新しいアナキズムの系譜学』河出書房新社、二〇〇九年。

(2) A. Prichard, "Justice, Order and Anarchy," *Millennium* 35(3), 2007, 623–645; A. Prichard, "Introduction: Anarchism and World Politics," *Millennium* 39(2), 2010, 374–380; R. Falk, "Anarchism and World Order," in *Anarchism*. edited by J. R. Pennock and J. W. Capman (New York University Press, 1978), 63–87; T. Weiss, "The Tradition of Philosophic Anarchism and Future Directions in World Policy," *Journal of Peace Research* 12(1), 1975, 1–17.

(3) A. Prichard, "What can the Absence of Anarchism tell us about the History and Purpose of International Relations," *Review of International Studies* 37(4), 2011, 1647–1669.

(4) K. Booth, "Security and Emancipation," *Review of International Studies* 17(4), 1991, pp. 313–326 : Ken Booth, *Theory of World Security* (Cambridge University Press, 2007), 114.

(5) I. M. Young, "The Logic of Masculinist Protection," *Signs* 29(1), 2003, 1–25.

(6) R. J. Rummel, *Death by Government* (Transaction Publishers, 1996), 14–15.

(7) K. Walz, *Man, the State and War* (Columbia University Press, 1954), 238.

(8) B. C. Schmidt, *The Political Discourse of Anarchy* (State University of New York Press, 1998), 231–236.

(9) H. Bull, *Anarchical Society* (Macmillan, 1977).

(10) H. Tosa, "Anarchical Governance," *International Political Sociology*, 3(4), 2009 414–430.

(11) プルードン（長谷川進訳）「所有とは何か」『プルードンⅢ』三一書房、一九七一年、二九五頁。

(12) 田中ひかる『ドイツ・アナーキズムの成立』御茶の水書房、二〇〇二年、一八―一九頁。

(13) 例えば、F・ベラルディ（廣瀬純他訳）『イタリア・アウトノミア運動史』洛北出版、二〇一〇年、三四八―三五〇頁。

(14) J・デリダ（鵜飼哲他訳）『ならず者たち』みすず書房、二〇〇九年、三二頁。

(15) A・ネグリ＝M・ハート（幾島幸子訳）『マルチチュード（下）』日本放送出版協会、二〇〇五年、一八九―一九九頁。

(16) バクーニン（石堂清倫訳）「国家と無政府」『バクーニンⅠ』三一書房、一九七〇年、三一頁。

(17) M. Abensour, *La Démocratie contre l'État* (Felin, 2004), 161–190.

(18) J. Purkis and J. Bowen eds. *Changing Anarchism* (Manchester University Press, 2004); R. Amster et al., *Contemporary Anarchist Studies* (Routledge, 2009); N. J. Jun and S. Wahl eds. *New Perspectives on Anarchism* (Lexington Books, 2010); D. Rousselle and S. Evren eds. *Post-Anarchism* (Pluto Press, 2010).

(19) F. Depui-Déri, "The Political Power of Words: The Birth of Pro-democratic Discourse in the Nineteenth Century in the United States and France," *Political Studies* 52, 2004, 118–134.

(20) ハミルトン＝ジェイ＝マディソン（斎藤眞他訳）『ザ・フェデラリスト』岩波書店、一九九九年、六〇頁。

(21) E. Sader, "Toward New Democracies," in *Democratizing Democracy*. edited by Boaventura de Sousa Santos. (Verso, 2005), 449–450.

(22) E. Sørensen and J. Torfing eds., *Theories of Democratic Network Governance* (Palgrave Macmillan, 2007).

(23) Boaventura de Sousa Santos, "Participatory Budgeting in Porto Alegre," in *Democratizing Democracy*. edited by B. de S. Santos. (Verso, 2005), 307–376.

(24) *Ibid.*, 333.

(25) A.Gutmann and D.Thompson, *Why Deliberative Democracy?*

(Princeton University Press, 2004), passim.; J. S. Dryzek, *Deliberative Democracy and Beyond* (Oxford University Press, 2000), 1–30.

(26) R. E. Goodin, *Innovating Democracy* (Oxford University Press, 2008), passim.

(27) I. Shapiro, *The State of Democratic Theory* (Princeton University Press, 2005), 33.

(28) R. Dahl, *After the Revolution*. revised ed. (Yale University Press, 1990), 49–51; R. E. Goodin, "Enfranchising All Affected Interests, and Its Alternatives," *Philosophy & Public Affairs* 35(1), 2007, 40–68.

(29) W. E. Connolly, Identity/Difference (Cornell University Press, 1991), 210.

(30) W. E. Connolly, *The Ethos of Pluralization* (University of Minnesota Press, 1995), 152.

(31) J. Linz and A. Stepan, *Problems of Democratic Transition and Consolidation* (Johns Hopkins University Press, 1996), 17.

(32) D. Held, *Models of Democracy* (Polity, 1987), 6.

(33) A.Prichard, "David Held is an Anarchist. Discuss," *Millennium* 39(2), 2010, 43–459.

(34) P・クラストル（渡辺公三訳）『国家に抗する社会』水声社、一九八七年。

(35) J. C. Scott, *The Art of Not Being Governed* (Yale University Press, 2009).

(36) J. Michaud, "Editorial—Zomia and beyond," *Journal of Global History* 5, 2010, 187–214.

(37) Abensour, *op.cit.*, 161–190.

(38) M. Abensour, "Preface to the Italian Edition (2008): Insurgent Democracy and Institution," in *Democracy Against the State* (Polity, 2011), 23.

(39) C. Lefort, "The Question of Democracy," in *Democracy and Political Theory*. translated by D. Macey (University of Minnesota Press, 1988), 19.

(40) 共和主義の観点から自由を不干渉ではなく非支配として捉える考え方を提示したのはペティットであるが、この考え方とコスモポリタニズムやアナキズムとは架橋可能であろう。P. Pettit, *Republicanism* (Oxford University Press, 1977); J. Bohman, "Republican Cosmopolitanism," *The Journal of Political Philosophy* 12(3), 2004, 336–352.

(41) D. Graeber, *Direct Action* (AK Press, 2009), 203.

(42) K. Goaman, "The Anarchist Travelling Circus: Reflections on Contemporary Anarchism, Anti-capitalism and the International Scene," *Changing Anarchism*. edited by J. Purkis and J. Bowen (Manchester University Press, 2004), 163–180.

(43) H. Bey, *T.A.Z* (Autonomedia, 1985).

(44) S. Newman, *The Politics of Postanarchism* (Edinburgh University Press, 2010).

(45) T. May, *The Political Philosophy of Poststructural Anarchism* (The Pennsylvania State University Press, 1994).

(46) P・K・ファイヤアーベント（村上陽一郎他訳）『方法への挑戦』新曜社、一九八一年。

(47) E. Cudworth and S. Hobden, "Anarchy and Anarchism: Towards a Theory of Complex International Systems," *Millennium* 39(2), 2010, 399–416.

(48) H. Spruyt, *The Sovereign State and its Competitors* (Princeton University Press, 1994).

(49) R. Falk, "Anarchism without 'Anarchism': Searching for Progressive Politics in the Early 21st Century," *Millennium* 29(2),

2010, 381–398.

(50) Weiss, *op.cit.*, 6.

(51) M. Bookchin, *Social Anarchism or Lifestyle Anarchism* (AK Press, 1995).

(52) アナキストのチョムスキーが厳然たる権力政治の現実を剔出してきたように、現状をどう分析するかは別の問題である。つまりアナキズムとは単なるユートピア主義ではなく依然として国家に根を張る権力政治の矛盾を冷徹に直視する悲観主義と国家主権に基礎を置く国際政治学的パラダイムそのものを揺さぶりつつポスト・ウェスファリア体系への道を照らし出そうとする楽観主義とを併せ持ったリアルな思想・運動と言えよう。R. Osborn, "Noam Chomsky and the Realist Tradition," *Review of International Studies* 35(4), 2009, 351–370.

（とさ　ひろゆき　　神戸大学）